



Title	<書評> Renaud Barbaras(dir.), "Sartre. Désir et liberté", PUF(Paris), 2005.
Author(s)	赤阪, 辰太郎
Citation	年報人間科学. 2014, 35, p. 167-171
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27125
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈書評〉

Renaud Barbaras(dir.)

Sartre. Désir et liberté

PUF(Paris), 2005.

赤阪辰太郎

はじめに

本書は現象学的哲学の影響下にあった時期のサルトルのテクストを扱った論文集である。主眼となっているのは『存在と無』(以下、ENと略記)における欲望と自由の解明であり、この2つの主題とかかわる対自存在の分析が中心に据えられる。

出版の背景を紹介しよう。本書が出版されたのはサルトルの生誕100年にあたる2005年のことだが、これに前後して、Renaud BarbarasとDaniel Giovannangeliを除く論文執筆者はサルトルの初期哲学をめぐる研究書を上梓している。「緒言」においてBarbarasは、現象学期のサルトルに注目が集まるまでのフランスにおけるサルトル研究の状況を以下のように要約する (Renaud Barbaras (dir.), *Sartre. Désir et liberté*, PUF (Paris), 2005, pp. 9-11. 以下、同書への言及はページ数のみを指示する。)。サルトルの生前ないし死の直後には、彼の知識人としての活動やマルクス主義との関係に関心が寄せられた。その際に参照されたのは『弁証法的理性批判』である。その後、ENの前に執筆された遺稿 (『奇妙な戦争の手帖』、『倫理学ノート』、『真理と実存』) の出版に伴い、ENにおいて予告されながらも断念された倫理学への関心が集まつた¹⁾。その後フランスでは現象学的著作が研究の中心となる。

Barbarasによれば、フランスの現象学者による仕事は、本国ではハイデガーのエピゴーネンとして受容されてきたが、その態度が見直され独自性を再評価する方向へと傾いた。メルロ＝ポンティ研究の領域では遺稿や講義録に見られる独自の存在論の分析が盛んになされ、再評価の試みは日本でもうかがい知ることができる。サルトルの場合も同じく、知識人としての影響や遺稿の研究が落ち着き、冷静な目で初期著作の哲学的可能性を精査することができるようになったことが研究の背景となっている。

本書の構成

次に本書に収められた論文をごく簡単に紹介する。「無限の自由」においてPhilippe Cabestanは、ENにおける自由の概念を、無化的後退、根源的選択、事実性の3つの段階に分けて考察する。つづくGiovannangeliによる「想像的なもの、世界、自由」では『想像力の問題』の結論部において展開される、世界と想像的対象の二重の無化による全体性としての状況の把握が主題的に論じられる。この無化と全体性についての議論は、ENにおける対自の無化へと引き継がれる。「自己性と時間性」においてAlain

Flajolietが明らかにするのは、EN第二部第一章で論じられる対自の自己性と、つづく第二章で扱われる脱目的な時間構造の関係である。Hazi Rizkによる「偶然性の受諾としての行動」は『倫理学ノート』などの遺稿に見られる記述を取り入れながら、初期サルトル哲学を内在の哲学として読み解く可能性を示す。Jean-Marc Mouillieによる「実存における自由の自己開示」では、EN期の自由概念と、後のサルトルが取り組むこととなる責任や価値の創造にかかる倫理的な問題との関係を探る。

このほかにBarbarasとVincent de CoorbyterがEN第二部第一章「対自の直接的構造」における対自概念を主題とした論文を収録する（『存在と無』における欲望と欠如：欠落した欲望」および『存在と無』における欲望のパラドクス）。両論文は後述する対自の構造にかかる重要な問い合わせに取り組むものであるほか、同一の主題を扱いながら対照的な解釈を施している点でも興味深い。次節ではこの2論文について、より内容に立ち入って紹介しよう²⁾。

内容紹介

1. 対自存在

ENの取り組む課題は「人間存在と諸現象の存在すなわち即自存在との、根源的な関係とはどのようなものか」³⁾を明らかにすることにある。この課題に取り組む際に用いられるのが対自 pour-soiと即自 en-soiという対概念である。EN第二部「対自存在」では、意識の存在と目される対自の解明が主題となる。その第一章「対自の直接的構造」では、意識の外的な対象である超越的な事物との認識的関係を論じる第三章の議論に先立って、対自存在そのものの構造と、対自の出現について論じられる。

以下ではまず対自の構造をENの記述からまとめ、その後「対自の直接的構造」の章で生じる問題を提示する。その問題にBarbaras、De Coorbyterがそれぞれどのように取り組んだかを紹介する。

即自には「それがあるところのものである」という定義を与えられる。この存在が抱える同一性ないし充実性ゆえに、即自は自己「から」自己「へ」の現前という関係的な契機、すなわち二元性をもつことができるのである。

一方、対自には2つの水準が認められる。志向性 intentionnalitéと自己（についての）意識 conscience (de) soiである。志向性の水準において、意識は自己を逃れ、即自へと向かう。自己ではないものとして即自へと向かう意識はもうひとつの関係を指示する。意識は即自に志向的であるだけではなく、「意識的に存在する être conscient」。この意識的な存在は意識そのものではなく、「自己（についての）意識」と呼ばれる。自己（についての）意識という対自の存在法則は、反省による志向的関係の問題化と区別される。対自は即自についての意識であり、「意識的である」という仕方で存在する。「意識的である」という仕方で存在する対自のあり方を「自己への現前 présence à soi」とサルトルは呼ぶ。「…への現前 présence à...」は一方から他方への関係性を含み、両項は完全に一致することがない。

構造上二元性をはらむ対自は欲望として提示される。先に見たように、対自は即自について志向的な関係を結ぶのだが、この他なる存在への開かれの条件をなすのは対自そのものが欠如であることによる。De Coorbyterの要約によれば、「対自は世界に開かれている。というのも、対自は世界を、即自存在を欠い

ているからである」(p. 96)。ここで志向性は欠けているものを追い求める欲望として理解される。

欠如である対自は、欠けていない状態（サルトルの用語に従えば欠如を被るもの *manqué*）の存在を想定させる。ここで欠如分を埋め合わせられた全体とは、対自において求められるものと対自身との総合、すなわち即自-対自 *en-soi-pour-soi* である。対自は全体を欠いており、その回復を追い求めている存在である。

対自の概念をめぐって大きく 2 つの問い合わせられる。すなわち、1. 即自-対自とは何か、2. 対自はいかにして出現するか、である。即自と対自は相矛盾する定義を与えられていることからもわかるとおり、互いに排除しあう「両立不可能な *imcompatible*」(p. 103) 存在である。そのため、即自-対自という全体は現実化することができず、理想として立てることができるとても、それに到達することはできない。

以下では上の問題に関係する箇所を中心に De Coorbyter と Barbaras の見解を見ていきたい。

2. 「『存在と無』における欠如と欲望：欠落した欲望」

Barbaras 論文はサルトルの論述から帰結する困難を指摘するものである。批判のポイントとなるのは、対自の欲望が欠如として定義されることにある。

Barbaras が試みるのはフッサーが開いた現象学のプロジェクトに EN を位置づけることである。また、Barbaras はサルトルの意図を再現することを目指すのではなく、彼の記述をそのままに受け入れた場合に導かれる帰結に関心をそそぐ。その上で Barbaras が下した評価とは、ENにおいて対自の欲望が欠如として定義される限り、サルトルは即自が存在することをあらかじめ前提した自然的態度に陥る、というものである (p. 115)。

Barbaras の見解を見ていく。Barbaras は現象学の仕事とは超越的存在者と主観的所与の諸様態のアブリオリな相関関係を解明することにあるという (p. 113)。この定義を彼は『危機』書から引き出しているが、相関関係の分析自体はフッサーが『論理学研究』の時期から取り組んでいたものである。この研究課題を EN に当てはめると、前反省的コギトすなわち自己 (についての) 意識と、即自との相関関係を探求することがサルトルにおける現象学の課題である (p. 118)。

上でも触れたように、対自の即自に向かう志向性は欲望として示されていた。対自を欲望として定義すること自体に Barbaras は異論を唱えるわけではない (p. 115)。そうではなく、欲望が欠如と同一視されることを問題とするのである。欲望が欠如であるとき、欠如とは即自の欠如であり、即自ではないことである。すなわち、即自の不在が対自であることである (p. 123)。もし この仮定を受け入れるならば、欲望は即自の裏面に過ぎず、欲望の本質をなす満たされなさと、充実の無限の追求を説明できない。

また、対自の出現について言えば、対自が即自の欠如から説明されることから、即自との関係からしか説明できず、その意味で即自が対自に先行する。このとき欲望であり欠如であるような対自は、即自そのものからは出現できない。というのも、サルトル自身が即自に与えた定義が自己との完全な一致であり、一切の関係性をもたない存在だったからである (p. 137)。ここで対自の出現の基盤として即自-対自の助けを借りることはできない。即自-対自という不可能な全体性が現実化されえないものである限り、それは何も欠いてはおらず、対自はもはや何も欲望しないからである (p. 133)。

上で示されたように、欲望を欠如として定義することからいくつかの困難を含んだ帰結が導かれた。なかでも即自の先行性を認めるサルトルの議論は、フッサール現象学のプロジェクトのなかにサルトル哲学を位置づけたとき、さらなる批判を招く。欲望は即自以前に存在することが出来ず、相関関係の分析に先立つて即自の存在を認めることがサルトル的な現象学の出発点である。事実、サルトルはENの導入において即自の対自に対する先行性を認めており、その意味でもBarbarasの指摘は正確なものである。また、実在を括弧いれし、現れと主觀性との関係を問題化する現象学の試みにとって、この前提が致命的なものであることは確かである。こうした傾向をもつサルトルの議論をBarbarasは素朴実在論的な前提にとどまっていると評価する（p. 140）

Barbaras論文は、フッサールの後継者としてサルトルを理解することができないことを示している。また、彼の哲学がある種の解釈を（次に紹介するDe Coorbyterによる、即自-対自の解釈のような）施さない限り、破綻をきたすということを明らかにしたと言えるだろう。前者の点については、サルトル自身が論文「自我の超越」をフッサールとの対決のためのものと位置づけており、またENの随所でフッサール批判を行っていることからもわかるとおり、正当なフッサールの繼承者としてサルトルを考える必要はない。しかし、後者の点についてはある解釈を加えることでサルトル哲学を発展継承していくことに賭けられている。De Coorbyterの論文はその解釈の一例である。

3. 「『存在と無』における欲望のパラドクス」

即自-対自が両立不可能なものであるという前提を受け入れた上で、De Coorbyterはなおこの想定を維持することの意義を主張する。また、このことを通じて彼が目指すのは、字義通りに解釈すると問題を抱えているように見えるサルトルの議論を、サルトル自身の意図を復元しつつ、整合的に解釈することである。

対自は自己の欠如が埋められることを求めて即自へと超越する。しかし、それを通じて対自にもたらされるものは対自そのものの欠如ではありえないだろう。対自が即自へと向かうことを通じて行うのは、即自のなかへと消え入ることないし即自への凝固ではなく、対自固有のあり方において自らを充実に導くために、自己とは反対の存在様態と交わることで、自己を保存することである（p. 103）。

ここで、全体性は対自の何が欠けているかを告げ知らせるものとして、常に働き続ける。その何かを求めて対自は即自の方へと超越するが、その果てに得られるのは対自ではないものである。こうして、対自による即自の追い求めは永遠に続く。即自-対自はその追い求めを作動させ続けるものとして、現実化されない形で働き続けるのである（p. 102）。

第二の問題である対自の誕生にかかる側面でも、即自-対自は要請される。対自の出現とは、自己の偶然性に気付いている即自の、自己の偶然性ないし無根拠さを除き去るために基礎付けを求める努力によって触発される。対自の出現の起源にある即自は、自己の根拠の不在をおそれ、根拠付けされることを求めるような存在である。De Coorbyterが対自の欲望を作動させるものとして提示した全体性は、対自の起源である即自のなかにも見出される。自己の根拠の不在に気づいているような即自は、先に与えられた「あるところのものである」ような、自己同一的な充実とは本質的に異なるはずである。これは、潜在的には

即自-対自である。こうして、De Coorbyterは対自の欲望の無尽蔵性、ないし即自の基礎づけとしての対自の出現に必要な契機として即自-対自という想定を受け入れている。

この他にDe Coorbyterは、即自-対自を認める利点として、欲望のモデルが物理現象に還元できない人間の行為のダイナミズムを説明できることなどを挙げる。いずれの理由にせよ、一見非整合的にみえるサルトルの議論を、彼の狙いを捉えながら整合性をもって解釈する可能性を示す試みがなされていると言えるだろう。

おわりに

Barbarasの突きつける問い合わせ、またDe Coorbyterが施す解釈のいずれも、サルトル研究に携わる者にとって無視できないものである。実現不可能な全体性はENのなかでは具体的なものconcretと呼ばれ、具体的なものをめぐる考察は後期著作に至るまで取り組まれ続ける。遺稿研究が進められた現在、初期哲学が抱えていた問題がその後どのように捉え直され変奏されていったかを、生前とは別の仕方で精査することが可能となった。その意味でも、今、再びENに立ち返ることは意義のあることである。

また、不可能な全体性をめぐるサルトルの議論は、彼と同時代のバタイユによる脱自ないし不可能なものについて理解を進める上で、また、自己原因的に対自を生産し自己を基礎づけるという発想に見られるスピノザ主義の影響を現代哲学のなかで精査する上で、参考項でありつづけるだろう。こうした関心からサルトルに接近する際に、本書で紹介した論文に見られるサルトル哲学へのアプローチは私たちに読解のヒントを与えるのではないか。

注

- 1) この課題に取り組んだ代表的な邦語文献として澤田直『呼びかけの経験』、人文書院、2002年がある。
- 2) 両論文が、遺稿である『奇妙な戦争の手帖』をENと連続性をもつ準備草稿として扱い、読解に導入している点を付言しておく。
- 3) Jean-Paul Sartre, *L'être et le néant*, Gallimard (Paris), coll. «tel», 1976, p. 207.